

本科 0 期 2 月度

解答

Z会東大進学教室

早慶大世界史



4章 共和政ローマ

問題

【1】

解答

1 B 2 A 3 ABC 4 ×

解説

共和政ローマに関する正誤問題。設問が「A, B, Cのうち正しいものをすべて」選ぶ形式になっているため難易度が少し高くなっている。ただ、今回の選択肢内の誤りの部分は概ねわかりやすい間違いとなっており、重箱の隅をつつくような設問ではないので、文章をしっかりと読んで判断していこう。

1 A 共和政ローマにおいて、事実上の最高国政機関・統治府だったのは元老院であるが、「常設」機関ではなく、通例、コンスルが開催を招集した機関であった。定員は300名だったが、その数は徐々に増加した。なお、「パトリキのみならず～得て行った」という部分に誤りはない。

B 正しい。共和政ローマの最高政務官であるコンスル（執政官）は民会の1つの兵員会で選任され、元老院の承認を受けて就任した。ディクタトル（独裁官）は、何事においても決定するまでに時間のかかる共和政の欠点を補うために設立された官職で、戦時や疫病の流行など一刻を争う事態が発生した場合に限り元老院が任命した。ディクタトルの命令にはコンスルでさえ従わねばならず、その権威は絶大であったため、定員は1名、任期は6ヶ月と定められた。

C 古代ローマの全市民参加型民会はコムティアと呼ばれた。古代ギリシアの民会は、各ボリス毎にそれぞれ呼称があり、エクレシアと呼ばれたのはアテネの民会である。文中にある「ソロンの改革」はギリシア民主政での出来事である。しかし後半の「兵員会」と呼ばれる民会と、そこでのコンスルの選挙はローマの事項である。以上の通り、この文章ではギリシア民主政とローマ共和政の事項が混ぜてあるので、注意深く読んでいく必要がある。

2 A 正しい。平民の利害を代表する護民官はその命を狙われやすかったため、とくに身体の神聖不可侵が規定されたのである。

B この間違いにはすぐに気付いてほしい。リキニウス・セクスティウス法（前367）の特色は、プレブスのパトリキに対する不満を解消するために、定員2名のコンスルのうち、1名をプレブスから選出することとした点にある。

C ホルテンシウス法（前287）により、平民会の議決が元老院の承認を受けずに法律となることが定められ、一応パトリキとプレブスの身分闘争は終結した。

3 ポエニ戦争についての記述はどれも正しい。

4 A・B 属州の徵税はエクイテスと呼ばれる騎士階級が請け負い、私腹を肥やして台頭した。

C ポエニ戦争後、没落した市民たちの土地を吸収し、征服戦争で得た大量の奴隸を使用するラティンディアが盛んに行われた。奴隸たちの反乱は共和政末期のいわゆる“内乱の1世紀”に多発している。一方で、土地を失った市民たちはローマになだれ込み、「パンと見世物」を要求する遊民となったり、有力者の傭兵となったりした。

【2】

解答

- A ティベル B エトルリア C ギリシア D パトリキ E ホルテンシウス
F シチリア島 G 騎士 H ラティンディア I 閥族 J アクティウム
K アウグストゥス
(1) リウィウス (2) スバルタクスの反乱 (3) リキニウス・セクスティウス法
(4) キケロ

解説

帝政に移行するまでの、主にローマの政治と社会の変遷についての問題。設問はいずれも基本的な内容なので、確実に正解したい。ローマにおける身分闘争、支配階層の移り変わりについて問題文を改めてよく読み、流れを把握しておきたい。

- A・B ラテン人は交通の要地であるティベル河畔にローマを建設した。伝承によると前6世紀末にはエトルリア人の王を追放し、貴族共和政を採ったとされる。
- C タレントゥムは、前8世紀末にスバルタが植民市タラスとして南イタリアに建設した。前272年にローマに征服され、以後タレントゥムと呼ばれるようになった。第2回ポエニ戦争時にはハンニバル側で戦ったが、ローマに奪回された。
- D ローマでは任期1年の2名のコンスル（執政官）が最高政務官として行政・軍事を指揮し、元老院が最高の立法・諮詢機関としてコンスルを監督・指導していた。コンスルや元老院の官職はパトリキと呼ばれる貴族階級が独占していたため、プレブスと呼ばれる平民は参政権を要求してしばしばパトリキと対立した。
- E 前287年のホルテンシウス法により、平民会の決議が元老院の承認を経なくても国法となることが定められ、貴族と平民の間の法的平等が達成された。しかし、この頃には有力な平民は元老院に入り、ノビレス（新貴族）と呼ばれる新しい支配層が形成されていたため、元老院が権威と実権を掌握する体制に変わりはなかった。
- F 第1回ポエニ戦争に勝利したローマはシチリア島を最初の属州とした。シチリア島は地中海交易の要地であるとともに、最大の穀物生産地でもあったため、ローマは安価な穀物を大量に輸入することが可能となった。
- G・H 貴族や富裕な平民は、公有地の占有や農民からの土地買占めによって大土地所有者となり、奴隸を投入してブドウ・オリーブなどの商品作物を栽培させる、ラティンディアと呼ばれる大土地経営を行った。また、属州では、新興の富裕市民が騎士（エクイテス）階級となり、属州での徴税や土木事業を国家から請け負って台頭した。
- I 富裕な市民が台頭する中で、元老院中心の政治体制を維持することを主張する閥族派（オプティマテス）と、平民の権利の拡大を主張する平民派（ポプラレス）が対立し、抗争する

ようになった。閥族派の代表的人物であるスラ、平民派の代表的人物であるマリウスの名も併せて覚えておきたい。

- (1) リウィウスはアウグストゥスの厚遇を得て、『ローマ建国史』を著した。建国より前9年までのローマの歴史を叙述したもので、ラテン文学の代表的な散文とされる。
- (2) 前73年、剣奴スバルタクスの指導による奴隸の大反乱が勃発した。一時は数万の奴隸軍がイタリア各地でローマ軍を破るほどであったが、前71年にポンペイウス、クラッススらに鎮圧された。
- (3) 前367年に制定されたリキニウス・セクスティウス法は、貴族などの有力者による公有地の占有を制限し、コンスルの1人を平民より選出することを定めた。
- (4) キケロはギリシア思想のローマへの普及に努め、『国家論』などを著し、その文体はラテン語散文の模範とされた。

【3】

解答

問1 ① 十二表 ② コンスル（執政官） ③ ホルテンシウス ④ シチリア

問2 ⑦ 同盟市戦争 ④ チュニジア ⑨ クラッスス

問3 たび重なる戦争の中、戦費自弁の原則によって農民は困窮し、農地も荒廃した。属州からの安価な穀物流入やラティフィンディアによる大規模な商品作物生産により、農民の作物生産は打撃を受けた。(89字)

解説

ローマにおける法と政治についてまとめた問題。中小自作農民の没落については頻出なので、因果関係を今一度整理しておきたい。

問1 ① 前450年頃、旧来の慣習法を明文化した十二表法が制定され、貴族による法知識の独占が打破された。

② 「前4世紀に制定されたある法」とは、リキニウス・セクスティウス法のこと。これにより、コンスルのうち1名は平民より選出されること、貴族などによる公有地の占有を制限することなどが定められた。護民官であったリキニウスとセクスティウスが提案した。

③ ホルテンシウス法では、それまでは国家の正式な民会とは認められていなかった平民会での決議が、元老院の承認がなくとも国法とされることが定められた。ディクタトルであったホルテンシウスが制定した。

④ ローマは第1回ポエニ戦争に勝利し、シチリア島を属州とした。前135～前132年には大規模な奴隸反乱が勃発し、その後、前104～前100年にも再度反乱が起こった。

問2 ⑦ イタリア半島内の同盟市は、ローマによる外征に協力したにも関わらず、ローマ市民権を持たないために戦利品や土地の分配を受けられなかった。これを不満として、前91年に同盟市戦争が起こり、全イタリアの自由民にローマ市民権が与えられた。

① ポエニ戦争でローマと戦った都市カルタゴは、アフリカ北岸のチュニジアに位置する。前9世紀にフェニキア人の都市国家ティルスの植民市として建設され、西地中海交易によって栄えていた。

④ クラッスはポンペイウスとともにスパルタクスの反乱を鎮圧し、第1回三頭政治にも参画したが、パルティア遠征で戦死した。

問3 ポエニ戦争後、たび重なる外征によって、重装歩兵として国防の主力を担っていた農民層は困窮し、戦乱により土地も荒廃した。貴族や富裕な市民は荒廃した土地を買い占めてラティンディア経営を行い、商品作物を大規模に生産した。さらに、属州から安価な穀物が流入したことで農民はさらに経済的に圧迫され、離農して無産市民となり、都市に流入した。政治家など有力者たちは彼らを自らの支持者に取り込むために、食料や娯楽など（「パンとサーカス」と総称される）を提供した。

5章 帝政ローマ

問題

【1】

解答

- (1) ① (2) ④ (3) ③ (4) ④ (5) ② (6) ③ (7) ④ (8) ②

解説

古代ローマ史のうち、帝政期以降を扱ったもの。基本的な内容が中心だが、(6)や(8)のような年代に絡んだ問題では失点しがちなので要注意。

- (1) ②のインペラトルは凱旋将軍に対し元老院から与えられた称号で、カエサルにも贈られている。帝政期には皇帝の公称として用いられるようになった。③のディクタトルはローマ共和政期の独裁官をさすので、この2つはすぐに除外できるだろう。残る2つがやや混乱しやすい。
- ④のプリンケプスは“第一の市民”を意味し、オクタヴィアヌスが自らの地位を帝位とは区別して使用した呼称である。これに対して元老院が贈った称号が、“尊厳者”を意味するアウグストゥスである。
- (2) やや難しいが知っておきたい。アウグストゥスの対外政策の中でもトイブルクの戦いは重要である。この結果、ローマはゲルマニア経営を断念するのだが、その国境線となったライン・ドナウ両河川の流域については地図でチェックしておこう。
- (3) ローマ帝国領は主要な時代ごとに確認しておく必要がある。
- (4) これは五賢帝を順序正しく覚えていれば簡単に解ける問題である。
- (5) カラカラ帝については、212年にアントニヌス勅令を発布して帝国市民すべてにローマ市民権を与えたことと、大浴場の建設の2点を押さえておけばよい。
- (6) 軍人皇帝時代は235年から284年までなので、③の50年が正解となる。
- (7) コンスタンティヌス帝のキリスト教政策としては、313年のミラノ勅令と25年のニケア公会議の開催の2点を、細部まで確認しておく必要がある。とくにニケア公会議については、ローマの司教でもコンスタンティノープルの司教でもない、皇帝自らが招集して開催したものである点にも注意しておきたい。
- (8) コンスタンティノープルの建設は330年である。古代のビザンティウム→コンスタンティノープル→現在のイスタンブルの歴史は、都市史の形でまとめておきたい。

【2】

解答

問1 メシア 問2 A ナザレ B パリサイ C ポンティウス＝ピラトゥス

問3 ミラノ勅令 問4 ニケア公会議 問5 ユリアヌス 問6 (ハ)

問7 (ハ) 問8 (ロ)

解説

キリスト教とローマ帝国との関係についてまとめた問題。どれも基本的な事項が問われております、全問正解をめざしたい。

問1 「ギリシア語の『クリストゥス』の語源」といった問題文にこだわらなくても、単に「ユダヤ教の救世主」という部分からメシアを想起すればよい。

問2 A ナザレはパレスチナ北部の小都市で、イエスはこの地で育ち、活動の中心とした。

B パリサイ派はパリサイ人とも呼ばれ、前2世紀頃からイエスの時代にかけて活躍したユダヤ教の一派である。厳格な律法の遵守を主張し、形式的な面を重んじた。

C ポンティウス＝ピラトゥス（ポンテオ＝ピラト）は、ローマ帝国のユダヤ総督（任26～36）として圧政を行ったとされる。

問3・問4 コンスタンティヌス帝のキリスト教政策はよく問われる所以注意しておくように。

問5 ユリアヌスはギリシア文化に深く傾倒し、コンスタンティヌスの政策から一変してキリスト教から見れば異教の神々を復活させようとしたため、後世“背教者”と呼ばれるようになった。

問6 アタナシウス派とアリウス派の教義の違いをもう一度確認しておくこと。アリウス派はゲルマン人の間に広まっていったことも覚えておこう。

問7 オーギュスティヌスは古代キリスト教最大の教父。著書としては『神の国』が有名であるが、この『告白録』も覚えておこう。

(イ) 新約聖書の一部。

(ロ) ずっと時代が下った17世紀のフランスの科学者・哲学者パスカルの遺稿『パンセ』の日本語訳タイトル。

(二) 16世紀の宗教改革の時代にカルヴァンが著したもの。カルヴァン派が商工業者の間に広まることになった要因が、この中でカルヴァンが唱えた「労働の結果の蓄財の肯定」と「労働は神への奉仕の一環」という主張である。これがやがて近代資本主義精神へと結びついていった。

問8 エフェソス公会議（431）で異端とされたのはネストリウス派である。これがササン朝ペルシアを経由して唐代の中国に伝わった。中国の史書では「景教」の名で呼ばれている。

(イ) 拝火教はゾロアスター教のこと。彼らが光明神の象徴として火を拝むことから名づけられた。

(ハ) 道教は中国に根付いた伝統宗教で、現在でも香港や台湾などで広く信仰されている。

(ニ) 白蓮教は弥勒下生を信仰する中国独自の仏教の一派で、しばしば農民反乱を指導した（元末の紅巾の乱、清中期の白蓮教徒の乱など）。

【3】

解答

- (1) (A) ○ (B) × (C) × (D) ○ (E) ○ (2) アエネイス (3) ネロ
(4) 大秦王安敦 (5) (イ) × (ロ) × (ハ) G (6) アッピア街道

解説

古代ローマの文化について、さまざまな視点から問われている。基本的な設問を確実に正解した上で、(5)のような異なる角度からの問題にも、落ち着いて対処していきたい。

- (1) (A) イラン起源で帝政期のローマに広まったミトラ教は、1～4世紀に、軍人や商人を中心^{しゆ}に広く信仰された。
- (B) キケロ（前106～前43）はカエサルの政敵としても有名である。このことから考えて前1世紀の共和政時代の人物と判断できる。
- (C) ポリビオス（前201頃～前120頃）は、小スキピオの師であり、第3回ポエニ戦争にもともに参加したことは有名である。このことから考えて前2世紀の共和政時代の人物と判断できる。
- (D) リウィウス（リヴィウス；前59～後17）が、オクタヴィアヌス（アウグストゥス）の依頼で『ローマ建国史』を著したのは有名である。
- (E) カラカラ帝時代の212年に、アントニヌス勅令で帝国領内の全自由民にローマ市民権が与えられたのは有名である。
- (2) 『アエネイス』はローマ建国伝説を題材とした叙事詩。祖国である小アジアのトロイア（トロヤ）を滅ぼされたアエネアスが遍歴の末にティベル川河畔の地にローマを築いたことが歌われている。
- (3) セネカ（前4頃～後65）がネロ帝の師であることは有名である。ネロの不興を買って自殺に追い込まれた。
- (4) 大秦とはローマを意味する。大秦王安敦の使いを名乗るものが、海路からベトナム中部の日南郡に到達したのは166年であり、これは五賢帝時代（96～180）の最後の時期に当たる。
- (5) ギリシア人の名前は名前の最後が「～as（アス）」「～es（エス）」「～os（オス）」「～on（オン）」で終わるのが特徴である。問題にあるガレノス（os）や、天文学者のプトレマイオス（os）、『対比列伝』のプルタルコス（os）、『地理誌』のストラボン（on）、『ローマ史』のポリビオス（os）などはローマ文化史に登場するギリシア人である。
- (6) アッピア街道はローマから南に下り、カプアを通りブルンディシウムに至る540kmの軍用道である。

【4】**解答**

問A 5 問B 4 問C 3 問D 5 問E 4 問F 4 問G 1
問H 4 問I 3 問J 1

解説

文化史に政治史をからめたギリシア・ローマ史に関する問題。問Cや問Jは難しいが、それ以外は基本事項なので確実にしておきたい。

問A 1のクセルクセス、3のヘラクレイトス、4のデモクリトスは著名なので除外できるだろう。キュロンは前632年頃、僭主となるためアクロポリスを占領したが失敗したアテネの

政治家。ピンダロスが正解で、競技会の優勝者への祝勝歌の作者として有名である。

問B 4のホラティウスはアウグストゥス帝時代の詩人で、その治世の平和をたたえた讃美歌を書いている。

問C やや難問。1の『国家論』はプラトン、2の『歴史』はヘロドトスやトゥキディデスなど、4の『新オルガヌム』はフランシス＝ベーコン、5の『告白録』はアウグスティヌスの著作の名である。アリストテレスの著作として『ニコマコス倫理学』は細かいが、消去法で答えられるだろう。

問D 1のリウィウス（リヴィウス）は『ローマ建国史』の著者。2のポンティウス＝ピラトゥスはイエスを処刑したユダヤ総督。3のユリアヌスはキリスト教を捨て、異教の復活を企て“背教者”と呼ばれた皇帝。4のアタナシウスはキリスト教神学の正統主義を打ち立てた人物。

問E 4の『対比列伝』は、ギリシア人の歴史家プルタルコスが書いたギリシアとローマの英雄についての比較評伝。

問F それぞれの年代は、1が前133～前121年、2が前91～前88年、3はマリウスが台頭する契機となったのがユグルタ戦争の鎮圧であることから前105年前後、4が前202年、5が前82年である。年代を暗記していなくても、ローマ史が整理されていれば解けただろう。

問G 「212年」は、カラカラ帝が帝国領内の全自由民にローマ市民権を与えたアントニヌス勅令を出した年である。

問H 4のエレクティオンはアテネのアクロポリスの丘にあるイオニア式の神殿。他の事項がいずれも建築物ではないため、消去法で解けるだろう。2のデーモスは市民・民衆という意味のギリシア語で、クレイステネスが導入した10部族制で用いられた単位のこと。

問I 3のプラマンテはイタリア＝ルネサンス最盛期の建築家。未習範囲の人物ではあるが、そのほかの選択肢はすべて有名なローマ時代の事物であるため、正答を導けるだろう。

問J やや難問。2のストラボンの出身地で悩むところではあるが、ガレノスがマルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝の典医だったことを知っていれば、1の誤りに気づけただろう。

【5】

解答

設問1 ④ 設問2 ② 設問3 ポエニ 設問4 ② 設問5 ローマ建国史

解説

ローマ史の研究に関する史学史が問題になっている。内容は概ね基本的なので、取りこぼしなく正解しておきたい。

設問1・2 ギリシア人の歴史家・軍人であったポリビオス（前201頃～前120頃）は、ローマの人質となり、小スキピオに重用された。彼はカルタゴの陥落を目撃し、ポエニ戦争におけるローマの勝利の原因究明という立場から『ローマ史（歴史）』を書いた。

設問3 第2回ポエニ戦争は、前218年から前201年にかけて発生した戦争。カルタゴの将軍ハンニバルの侵攻により、イタリア半島のローマ領は多大な被害を受けたが、最終的にはザマの戦い（前202）でローマの大スキピオがハンニバルを破り、勝利した。

設問4 アウグストゥスは“尊厳者”を意味し、元老院から贈られた称号である。オクタヴィアヌス自身は“第一の市民”を意味するプリンケプスを自称し、共和政の伝統を重んじる立場を示した。

設問5 ローマの歴史家リウィウス（リヴィウス）は、アウグストゥスの委託により『ローマ建国史』を叙述した。これは前8世紀後半から前9年までを対象としたもので、客観的歴史叙述というよりも、教育的・道徳的な視点から書かれたものであった。アウグストゥス時代の気風を後世に伝える作品とされる。

【6】

解答

設問1 万民法 設問2 ミトラ教

解説

ヘレニズム文化の伝播に関する問題。問題文はローマ文化とヘレニズム文化の関係についてよくまとまっているので、一読しておくとよいだろう。

設問1 「人類共通の自然法」という形容から、ローマ市民のみに適用されるローマ法（市民法）ではなく、法に服するすべての民族のもとで使われる共通の法、自然法である万民法が正解となる。ローマとその遺産を学習する際に、もう一度復習しておこう。

設問2 「ローマ帝政期に流行」「オリエントの密儀宗教」からミトラ教が正解。ローマ帝国ではキリスト教が公認されるまで、有力な密儀宗教・軍隊宗教として保護されていた。

【7】

解答

問1 ① 問2 ② 問3 ④ 問4 ① 問5 ③ 問6 ③ 問7 ②

問8 ④ 問9 ① 問10 ③ 問11 ④ 問12 ② 問13 ① 問14 ③

問15 ④ 問16 ① 問17 ② 問18 ③ 問19 ②

解説

古代ギリシア～ローマ帝国に関する基本問題。問3はやや難問であるが、消去法で解答は導けるだろう。以下の解説を読み、知識をより正確にしておこう。

問1 正解は①。アリストテレスの著書『政治学』中の有名なフレーズで、ポリスの法や道徳を破ることは、ポリスという生活基盤を破壊することにつながるとして警鐘を鳴らした。アリストテレスはその父がマケドニアの侍医だったこともあり、アレクサンドロス大王の家庭教師となった経歴がある。師であるプラトンのイデア論に疑問を抱き、現実主義・経験論的立場から批判したことは、世界史知識の範疇として押さえておきたい。彼は哲学（形而上学）を頂点とした諸学の体系化を行い、哲学以外にも諸学問（数学・生物学など）を集大成したため、“万学の祖”と呼ばれた。なお、彼がアテネに建設した学園リュケイオンは入試頻出用語。その他『アテナイ人の国制』や『形而上学』なども頻出著作なので覚えておきたい。

② ピタゴラスは、自然哲学者で万物の根源（アルケー）を数とした。

③ プロタゴラスは、アテネなどで活動したソフィストの代表人物で「人間は万物の尺度」として相対主義を表した。

④ プラトンは、アテネの学者で、アテネ貴族の家柄に生まれた。彼はソクラテスの弟子であり、師の思想を継承して普遍的真理とは何か、なぜ人間は真理を求めるのか、といった命題を探求し、独自の理想主義哲学を構築した。“イデア”（現実の不完全なもの）を越えて存在する最善最美の真実の存在の提唱は、プラトン哲学の中心概念なので必ず押さえておきたい。彼は理想的な政治のあり方（理想国家）についても考察し、シチリア島のシラクサで哲人政治の実現を試みたが失敗した。アテネに創設した学園アカデメイアや、著書『国家論』『ソクラテスの弁明』『対話篇』などは入試頻出用語なので、併せて覚えておきたい。

問2 正解は②。常識問題。アテネを例とするアッティカ型ポリスでは、アクロポリス（城山）とアゴラ（広場）を中心に先住民とギリシア人が融合して集住していた。また、外敵からの防衛のため、ポリスは城壁で囲まれていた。

③ パルテノンはアテネにあった簡素・莊重なドーリア様式を代表する神殿で、ペリクレスの命令で建設され、彫刻家フェイディアスが総監督を務めた。エンタシスと呼ばれる石柱の形状は、法隆寺の回廊柱にも影響を与えている。

④ フォルムは古代ローマで市民生活の中心だった公共広間。

問3 正解は④。やや難問であるが、①のゼウス、②のアポロン、③のアフロディテが有名なので消去法で解答を導きたい。

問4 正解は①で現在のナポリ。基本問題。①～④はすべてギリシア人の建設した植民都市。必ず資料集の地図でも確認しておくこと。

② ニカイアは現在のニースで、325年に公会議が開かれた小アジアのニケアとは別の都市。

③ マッサリアは現在のマルセイユ。

④ ビザンティオンは現在のイスタンブル。

問5 正解は③。『イリアス』はイリオン（トロイアの別名）の歌、という意味で、トロイア戦争中の数十日間を舞台とした物語。ギリシア軍の総司令官アガメムノンと勇者アキレスの対立から、アキレスとトロイア軍の総司令官ヘクトルとの戦いへ場面は展開する。『オデュッセイア』はトロイア戦争終結後、暴風雨に遭った英雄オデュッセウスが帰国し、財産と妻（ペネロペイア）の横取りを狙う者たちを倒し、妻や老父と再会を果たすというもの。

問6 正解は③。基本問題。トゥキディデスはペロポネソス戦争史を記述した『歴史』で厳密な資料批判を行い、“科学的歴史記述の祖”と評された。

① ヘロドトスは『歴史』でペルシア戦争史を物語的に記述した。見聞を交えて書かれたものである点を特徴として押さえておこう。

② リウィウス（リヴィウス）はオクタヴィアヌスの庇護を受け、『ローマ建国史』を著した。

④ タキトゥスは『ゲルマニア』でゲルマン人の各部族と風習を記録した。素朴なゲルマン人を称え、ローマ社会の退廃と対比させている。カエサルの『ガリア戦記』とともに、古代ゲルマン社会を知る重要な資料とされているので覚えておこう。彼の別著作である『年代記』では、オクタヴィアヌス没後からネロ帝の死没に至るまでの歴史を扱っており、ネロ帝による母親殺害やローマの大火、キリスト教の迫害などが記録されている。

問7 正解は②。

- ① ペロポネソス戦争ではなくペルシア戦争。
- ③ 20歳ではなく18歳。また、女性の参加は認められていなかった。その他に参政権を認められなかつた者としては、在留外人（メトイコイ）・解放奴隸なども該当するので覚えておこう。
- ④ 選挙ではなく、アテネの成年男子市民全員が参加した。

問8 正解は④。問2の解説を参照のこと。

- ① プラクシテレスは「ヘルメス像」が有名なアテネの彫刻家。
- ② プトレマイオスはローマ五賢帝時代にアレクサンドリアで活躍した天文学・数学者。著書の『天文学大全』は地球中心説（天動説）に基づく天文学理論書で、コペルニクス登場までのヨーロッパ・イスラーム世界の天文学の中心となった。また『地理学（入門）』では地理学=地図を書く学問と定めた。これは15世紀にヨーロッパに紹介され、その後の地図学に大きな影響を与えた。

問9 正解は①。基本問題。ヘレニズム時代の共通語はアッティカ方言をもとにしたギリシア語のコイネー。

- ② 世界市民主義をコスモポリタニズムという。
- ③ アレクサンドリアにはムセイオン（王立研究所）と図書館があり、ヘレニズム文化の中 心地として繁栄していた。
- ④ アルキメデスは^{てこ}梃子の原理や比重（浮体）の法則（アルキメデスの原理）を発見したが、シチリア島シラクサ出身の彼は、第2回ポエニ戦争中にシラクサへと侵入してきたローマ軍兵士によって殺害された。ヘレニズム時代の自然学者としてはほかに、以下の3人を押さえておこう。

人物名	事績
エウクレイデス（ユークリッド）	ヘレニズム初期に平面幾何学を大成した。
アリストタルコス	地球の自転（地動説）と地球の公転（太陽中心説）を論じた。
エラトステネス	地球球体説に基づき、地球の円周（子午線）を測定した。ムセイオンの館長を勤めた。

問10 正解は③。基本問題。共和政初期のローマでは貴族（パトリキ）が重装騎兵として活躍していた。兵員会でコンスルなどの主要ポストを決定しており、結果として貴族による政権独占が起こっていた。

問11 正解は④。ローマはギリシア人植民市タレントゥムを前272年に陥落させ、半島の統一を達成すると、これらを自治市・同盟市・植民市に分け、それぞれの待遇に差をつけることにより団結・反抗を防止する分割統治を行った。

問12 正解は②。農業国ローマの平民は中小自作農であり、重装歩兵軍団の中心となっていた。しかしポエニ戦争後、従軍による疲弊や農地の荒廃、属州から安価な穀物の流入など、複数の要因が関連して没落した。ローマ市民（農民）の没落過程は必ず整理し直しておこう。

問13 正解は①。基本問題。

- ② ムセイオンはアレクサンドリアに設置された王立研究所。

③ コロナトゥス（コロナートゥス）は征服戦争が行き詰まり、奴隸が減少したため行われた、コロヌス（没落した自由農民や解放奴隸）を労働力とした土地経営。

④ ドミナトゥス（ドミナートゥス）はディオクレティアヌスが後284年に始めた後期帝政。

問14 正解は③。基本問題。ウァレリアヌス（ヴァレリアヌス；位253～60）はササン朝のシャープール1世（位241～72）にエデッサで捕われた軍人皇帝。

① ネルヴァ（ネルヴァ；位96～98）は五賢帝の初代で、養子トラヤヌスに全権を委譲した。

② トラヤヌス（位98～117）は初めての属州（スペイン）出身の皇帝で、ダキア（現在のルーマニア）を属州化した。また、メソポタミア地域も一時占領するなど、ローマ最大の支配域を築いた。

④ アントニヌス＝ピウス（位138～161）は貧民救済事業と財政改革に努めた皇帝。他の五賢帝は、ブリタニアに長城を建設し、135年にユダヤ（ヘブライ）人をパレスチナから追放したハドリアヌス（位117～138）と、ストア派の哲人皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス（位161～180）。

問15 正解は④。市民権が帝国全土の全自由民に拡大されたのは、212年にカラカラ帝（位211～17）が発布したアントニヌス勅令による。

問16 正解は①。ローマ文化は、ギリシア文化の継承で独創性に乏しい（“ローマ人は政治的に征服したギリシア人に文化的に征服された”ホラティウス）一方で、現実的・実用的な法学・土木建築が発達した。

問17 正解は②。

① オウェイディウス（オヴィディウス）は共和政末期～帝政初期に活躍した。とくに中世に広く愛読された『転身譜』『愛の歌』が著名。

③ 問6の②を参照のこと。

④ キケロは共和政末期に活躍した文章家で弁論でも著名。カエサルやアントニウスを非難した弁論を行ったため暗殺された。著書『国家論』は必ず覚えておきたい。

問18 正解は③。当然といえば当然ではあるが、成立していないキリスト教は迫害できない。過去にもキリスト教迫害と関係のない人物として、初代皇帝アウグストゥスを選ばせる問題が出題されている。カエサルが暗殺されたのが前44年、イエスが生まれたとされるのが前7年頃／前4年頃、十字架上で処刑されたのが後30年頃と分かっていれば問題なし。

① カタコンベとは地下墓所のこと。迫害を受けたキリスト教徒たちが、これを避けるためにやむなく礼拝に利用したとされる。

② ネロ帝（位54～68）はキリスト教徒の増加に脅威を感じ、ローマの大火を口実に迫害を開始した。この治世下で使徒ペテロとパウロが殉教している。

④ ディオクレティアヌス帝（位284～305）は後期帝政（ドミナトゥス）を開始し、皇帝崇拜を強制した。これにキリスト教徒が従わなかったため、最大最後の大迫害が実施された。

問19 正解は②。トラヤヌス帝の治世下で支配域は最大となったが、ハドリアヌス帝以後、ローマ帝国は征服戦争に行き詰まり、それに伴い戦争奴隸の数は減少した。また、2世紀以降は解放奴隸も増加しており、この点からも「奴隸制がいっそう発展した」という事実は当てはまらない。

6章 インドの古典文明

問題

【1】

解答

- ① b・g ② a ③ c・e ④ d・g ⑤ c・f ⑥ d・e
⑦ b・g ⑧ d・g ⑨ b・e ⑩ c・h

解説

インダス文明からグプタ朝まで、古代インド史を総まとめした問題。基本的事項を多少ひねって出題しているので、リード文、問、選択肢の3者をよく読んで、しっかりと考えた上で正解を選んでいかねばならない。一問一答式の暗記力に頼るのではなく、じっくりと考える習慣を身につけよう。

- ① インダス川「下流域」が最大のポイント。4つの選択肢のうちクシナガラ以外の3つがインダス文明の遺跡なので、それらの正確な位置を知っているかどうかが分かれ道となる。間違えた人はよく復習しておくこと。

モエンジョ＝ダーロの特色にはgが該当する。eの兵馬俑坑は秦の始皇帝の墓所に設置されたもの。現在もその発掘作業が進められている。インダス文明にはfのような権力の存在を示す遺跡は発見されていない。hは言わずもがな。

- ② インダス文明と同時期の「西アジアの諸都市」の文明にはシュメール都市国家群が該当する。シュメール文明の持つ特色の中で、選択肢a～dに該当するものはaしかない（楔形文字は象形文字の一種である）。また、インダス文字をドラヴィダ系の言語と見る説から、ドラヴィダ人がインダス文明の建設者とも目されている。

- ③ ヴェーダの意味は“知識”（とくに宗教的知識の意）である。また言語についてはインドで発達した言語を答えればよい。

- ④ ウパニシャッド哲学は前7～前4世紀頃にバラモン教の祭式至上主義に対する自己改革として登場したと考えられる。因みに善悪二元論はゾロアスター教やマニ教の、三位一体はキリスト教の、一神教はユダヤ教・キリスト教・イスラーム教などの特色である。

ウパニシャッド哲学では、宇宙の根本原理としての梵（プラフマン）と自己の我（アートマン）が同じものである「梵我一如」ということの認識により、めぐる輪廻から解脱できると説いている。このアートマンと語感がやや似ているのがアーリマンなので間違えないこと。アーリマンはゾロアスター教の悪神で、善神はアフラ＝マズダである。なお、メシアはユダヤ教の救世主、ミトラはアーリヤ人の光明神である。

- ⑤ 基本問題。因みに仏教を開いたガウタマ＝シッダールタは八正道を、仏教の中でも大乗教学を確立したナーガールジュナ（龍樹）は菩薩信仰を説き、ゾロアスター教の一派マズダク教（のちに異端とされた）を開いたマズダクは終末観を強調した。

- ⑥ 下線部⑥の直後に「北西部インドをマケドニア・ギリシア人の勢力から解放した」とあり、

これをヒントに考えると c の秦帝国は消去できる。残った 3 者で北西部インドを支配した勢力はセレウコス朝しかない。

セレウコス朝から独立したのはパルティアとバクトリアなので、e が正解となる。アケメネス朝は前 6 世紀にメディアを滅ぼして独立した王朝である。

- ⑦ 基本問題。パートリップトラとブルシャプラは語感が似ているが、場所はまったく違う。必ず地図で確認しておこう。
- ⑧ これは単純に「インドの王朝」ではないものを選べばよい。パガン朝は後 11 ~ 13 世紀に成立したビルマ最初の統一王朝である。またチョーラ朝・パーンディヤ朝・サータヴァーハナ朝はどれもインド中・南部の王朝である。
- ⑨ ⑩にも関係するが、グプタ朝の時代にヴァルナを固定化する『マヌ法典』が完成したことを考えると、ヴァルナの上位に位置するバラモンが正解となる。
- 東晋の僧法顯はその著書『仏國記』にグプタ朝のチャンドラグプタ 2 世を超日王と記している。唐僧玄奘の旅行記『大唐西域記』に記された戒日王（ハルシャ = ヴァルダナ）と併せて覚えておきたい。因みに仏団澄はクチャ（亀茲）の僧で、4 世紀前半に洛陽で仏教を布教した。義淨は玄奘より後にインドに渡った唐僧で、インド・東南アジア方面に関する『南海寄帰内法伝』を残している。
- ⑩ 両方とも基本問題。インドでゾロアスター教が盛行したことはない。

【2】

解答

- [1] a ヴァルナ（制） b ガウタマ = シッダールタ c ヴァルダマーナ
d パータリップトラ e バクトリア f サータヴァーハナ（アンドラ）朝
g クシャーナ朝 h ブルシャプラ i ヒンドゥー教 j エフトル
k ハルシャ = ヴァルダナ l 玄奘
- [2] (1) サーマ = ヴェーダ、ヤジュル = ヴェーダ、アタルヴァ = ヴェーダのうちの 1 つ
(2) 偉大な自然に神性を認める汎神論的世界観。（20 字）
(3) 無常觀と人間平等觀に立脚し、八正道の実践で生老病死・輪廻からのがれられると説き、ヴァルナを否定した。（50 字）
(4) チョーラ朝 (5) 季節風貿易 (6) ナーガールジュナ（竜樹）
(7) (i) カーリダーサ (ii) メーガドゥータ (8) ナーランダー僧院
(9) アジャンター石窟寺院

解説

古代インドの宗教についてまとめた問題。穴埋め問題は基本的なので全問正解しておきたい。仏教の教えを 50 字以内でまとめることに、意外と苦労する人がいるかもしれない。一度書いてみた上で、教科書や用語集の表現をヒントに再度解答を作成してみるとよいだろう。

- [1] a アーリヤ人のインド定住により成立した身分制度がヴァルナで、当初はバラモン（司祭）、クシャトリヤ（貴族・武士）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隸属民）という 4 つの基本的身分で構成された。のちにこれらの身分が特定の職業と結びつき、複雑化・固定化した。

b・c 基本問題。

d マウリヤ朝（前317頃～前180頃）の都パータリップトラ（法顯のいう華氏城）は、現在のパトナに当たる。

e・g・h バクトリア（前255頃～前139）は、アム川流域に栄えたギリシア系国家で、インドにヘレニズム文化を伝えた。同地では前2世紀半ばに大月氏国が成立し、これから独立したのがクシャーナ朝（後1世紀～3世紀）である。クシャーナ朝の都はプルシャプラ（現在のペシャワル）に置かれた。

f・[2]-(5) 南インドでは、サータヴァーハナ朝がローマ帝国との季節風貿易などで栄え、2世紀初めに最盛期を迎えた。

i バラモン教がインド各地の民間信仰を摂取して形成されたヒンドゥー教（インド人の宗教の意）は、高度に哲学化して難解となった仏教を駆逐していった。

j 中央アジア一帯を支配した遊牧民族エフタルは、6世紀には西北インドにも進入した。しかし6世紀半ば、ササン朝のホスロー1世と突厥による挾撃を受け、滅亡した。

k・l 国禁を犯して求法のためインドに赴いた唐僧玄奘は、ヴァルダナ朝を建てたハルシャ＝ヴァルダナの厚遇を得て、多数の教典・仏像を携え645年に帰国した。

[2] (1) ヴェーダとは知識を意味し、宗教的知識を集めた聖典で、『リグ＝ヴェーダ』（神々への讃歌）・『サーマ＝ヴェーダ』（詠唱が目的）・『ヤジュル＝ヴェーダ』（祭礼を扱う）・『アタルヴァ＝ヴェーダ』（呪法が中心）の4つがある。

(2) アーリヤ人は自然現象に神性を認める汎神論的世界観を持ち、太陽や雷に供物を捧げた。牛を神聖視する風習は、現在にも受け継がれている。

(3) 仏教では苦行ではなく八正道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）の実践により、人は生老病死の四苦や輪廻から逃れられ、解脱できるとした。

(4) チョーラ朝（前3世紀～後13世紀）は南インドの王朝で、東南アジアにも進出した。

(5) 1～2世紀にはインド洋の季節風（モンスーン）を利用した貿易が栄んになり、ローマ南インドまで商圏を拡げた。

(6) ナーガールジュナ（2～3世紀）は、南インドのバラモン出身で、大乗仏教の教義を哲學的に基礎付け、その体系化を行い『中論』を著した。

(7) (ii)はやや難しい。カーリダーサの作品を問われるとつい『シャクンタラー』と答えてしまいがちだが、『シャクンタラー』は戯曲なので誤りとなる。正解は『メガドゥータ』。カーリダーサはグプタ朝のチャンドラグプタ2世（位376～415頃）の宮廷詩人で、サンスクリット文学に名高い作品を残した。受験レベルでは戯曲の『シャクンタラー』、抒情詩の『メガドゥータ』の2つを覚えておきたい。

(8) グプタ朝が創建したナーランダー僧院は、玄奘や義淨が学んだことでも有名である。

(9) アジャンター石窟寺院は、19世紀前半に初めて発見された。6～7世紀に描かれたと見られる多くの壁画は、グプタ美術の代表とされ、中国・日本にも伝播した。

【3】

解答

問1 ア ヴァルダマーナ（マハーヴィーラ） イ イラン ウ カニシカ エ 法顕
オ アジャンター

問2 クシャトリヤ 問3 スリランカ（セイロン） 問4 パキスタン

問5 玄奘、義淨

解説

仏教を中心に、古代インドの基本的な事項を問うている問題。全問正解をめざしたい。

問1 ア ほぼ同時期に成立した仏教とジャイナ教については、それぞれの開祖、主張、支持層の3点について比較・整理しておくこと。どちらにも共通するのは、ヴェーダの権威（ヴァルナ）を否定した点である。

イ 受験世界史ではクシャーナ朝はイラン系と覚えておけばよい。

ウ 仏教を保護した古代インドの王として、マウリヤ朝のアショーカ王、クシャーナ朝のカニシカ王は問われやすい。とくにアショーカ王に関しては、いかに統治政策に仏教教義を反映させていったのか、「ダルマ」というキーワードに注目して整理しておきたい。

エ 中国からの渡印僧としては、東晋の法顕、唐の玄奘、唐の義淨の3人が有名である。それぞれのインドまでの往路と復路、訪ねた先のインドの王朝とその国王、そして旅行記の3点についてしっかりと整理しておくこと。どれも頻出事項である。玄奘は27歳、義淨は37歳でインドへの旅に出発したが、なんと法顕は62歳で長安を出発している。同行した仲間の多くは途中で帰国したが、彼は意志を貫いてインドに赴き、14年後に海路帰国し、その体験を『仏国記』にまとめた。

オ ここで問われているのは仏教美術の最盛期の結晶たる石窟寺院なので、仏教壁画で有名なアジャンター石窟寺院が正解となる。インドの有名な石窟寺院としては他にエローラもあるが、こちらは7～10世紀頃の壁画や彫刻が中心である。エローラは34窟の石窟寺院でも有名で、7世紀頃までに作られたものが12窟、7～9世紀にかけて造営されたヒンドゥー教のものが17窟、9～12世紀にかけてのジャイナ教のものが5窟で構成されている。その中でもとくにヒンドゥー教寺院がその彫刻の頂点を成すものとして有名である。

問2 ガウタマ＝シッダールタはシャカ族の王子であるから、クシャトリヤ出身となる。

問3 アショーカ王の布教活動として、王子マヒンダの派遣によるスリランカ（セイロン）布教は必ず押さえておきたい。

問4 ガンダーラ地方はパキスタンの西北部の古名で、その中心地は現在のペシャワルに当たるブルシャプラである。アフガニスタンと間違えやすいので、歴史地図および現代世界地図の両方でしっかりと確認しておこう。

問5 ナーランダー僧院に留学したことが明らかな唐僧は玄奘・義淨である。

【4】

解答

- 問1 ③ 問2 ① 問3 ③ 問4 ② 問5 ① 問6 ④ 問7 ⑤
問8 ③ 問9 ②

解説

古代インド史を中心に、オリエントやヘレニズム時代についても幅広く出題した問題。基本的事項が中心を占めているので、確実に正解したい。

問1 アーリヤ人の定住後、前10世紀から前7世紀にかけてヴァルナと呼ばれる厳格な身分制度が成立した。司祭であるバラモンを最上位とし、ヴァルナの第2位に位置する武士・貴族階級であるクシャトリヤ、第3位に位置する一般庶民階層であるヴァイシャ、最下位に位置する隸属民階層であるシードラという4つの基本的身分によって構成された。

問2 マガダ国はインド最古の王国の1つである。前5世紀には勢力を二分していたコーサラ国を併合して、北インド最大の勢力となった。前4世紀後半、マガダ国の武将であるチャンドラグプタがパータリップトラ（現在のパトナ）を都としてマウリヤ朝を建てた。チョーラ朝は、前3世紀から後13世紀にかけて南インドを支配したドラヴィダ系タミル人の王朝である。

問3 アケメネス朝は第3代ダレイオス1世（位前522～前486）の時代に最盛期を迎えた。

前500～前449年、ミレトスを中心とするイオニア諸都市の反乱からペルシア戦争が起こった。戦いはアケメネス朝の敗北に終わり、ギリシア諸ポリスはアケメネス朝の再度の攻撃に備えて、前478年頃にアテネを中心に軍事同盟のデロス同盟が結成された。

問4 マケドニアのアレクサンドロス大王は、前334～前324年に東方遠征を行い、アケメネス朝を倒して、中央アジアからインダス川西岸までを征服した。アリストテレスはアレクサンドロス大王の教育係を務めたが、『国家論』を著しアカデメイアを建てたのはプラトンなので、選択肢②が誤りである。

問5 ヘレニズム文化における共通語は、コイネーと呼ばれるギリシア語であった。ラテン語が文化圏の共通語となったのは、中世ヨーロッパにおいてである。なお、アム川上流域にギリシア系住民が建てた（E）王国とは、バクトリアのことである。

問6・問7 マウリヤ朝は第3代アショーカ王（位前268頃～前232頃）に最盛期を迎え、半島南端部を除くほぼ全インドを統一した。マウリヤ朝は前2世紀初頭に滅び、その後北インドの中央部は、後320年頃にグプタ朝が成立するまで政治的分裂状態が続いた。マウリヤ朝の衰退後、イラン系やギリシア系の人々が西北インドに侵入し、1世紀頃には大月氏の支配下にあったイラン系クシャーナ族（クシャーン人）が自立してクシャーナ朝を建てた。クシャーナ朝は2世紀中頃のカニシカ王の時代に最盛期を迎える、その治世下でヘレニズム文化の影響を受けた仏教美術であるガンダーラ美術が栄えた。

問8 グプタ朝期に建てられたナーランダー僧院は仏教学の中心であり、各地から僧侶がこの地を訪れた。7世紀前半には玄奘が、同世紀後半には義淨がここで仏教を学び、玄奘は『大唐西域記』、義淨は『南海寄帰内法伝』を著した。法顯は東晋の僧で、チャンドラグプタ2世の治世下のグプタ朝などを訪れ、『仏國記』を著した。仏団澄・鳩摩羅什は西域から中国を訪れ、中国での仏教の布教を行った人物である。

問9 グプタ朝時代にはインド古典文化が栄え、純インド的な様式の仏教美術が栄えた。ギリシア的要素の濃い仏像が制作されたのは、クシャーナ朝時代のガンダーラ美術においてである。

W3M
早慶大世界史



会員番号		氏名	
------	--	----	--